

---

# 化物語 -もう一つの物語-

神無月愛衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

化物語 - もう一つの物語 -

### 【Nコード】

N8451Z

### 【作者名】

神無月愛衣

### 【あらすじ】

“この世界だって、無数に存在する平行世界の一つにすぎないんだよ”

夏休みが明けしばらく経ったある日。阿良々木暦は気付かぬ間に、今までで最も最悪な目に陥ってしまうのだった。すっかり変わってしまった世界で、為す術もなく混乱する暦がとった手段とは

## 登場人物

『化物語 - もう一つの物語 -』

↓登場人物↓

・阿良々木暦

・戦場ヶ原ひたぎ

・八九寺真宵

・神原駿河

・千石撫子

・羽川翼

・忍野忍

・阿良々木火憐

・阿良々木月火

・忍野扇

・斧乃木余接

・臥煙伊豆湖

↓注意書き↓

・この小説の語り部は、お馴染みの阿良々木くんです。

・時系列は、『鬼物語』から数日が経った頃。

・私オリジナルなので、所々、キャラクターの口調などが違つかもしれませんが、『物語シリーズ』の

雰囲気を出せるよう、頑張ります!!

## 第一話 プロローグ（前書き）

私が好きなアニメの一つ『化物語』。

今回その小説を書いてみました。

時系列的には、『鬼物語』のあとでしょうか。

私なりの『物語』の世界をお楽しみください

## 第一話 プロローグ

忍野忍は、僕の中で最も大切な戦場ヶ原を除いて存在である。

その関係は、何度も繰り返すように、第三者からは、分かりづらいものだろう。

忍は僕の主人で。  
僕は忍の主人で。

これ以上ないくらい ややこしいものである。  
理解不能なくらい またはそれ以上。

それでも、誰がなんと言おうと、忍は大切な存在なのである。  
あの頃 春休みが終わった瞬間から。

または、春休みが始まった……彼女と出会った瞬間から。  
片時も忘れることがないくらい。

大事なのである。

一生背負っていくと 誓ったのである。

そんな忍が、今、旧名の『キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード』ではなく、『忍野忍』でいてくれることは、  
いてくれることに。

僕は感謝している。

その、外見年齢八歳の幼女の姿でいてくれることが。

何よりの安心感を生む。

安心して今日を生きていられる。

あの、自殺志願の吸血鬼ではないことに、感謝している。  
それくらい大切に、一生背負っていく存在の忍だが

しかし である。

今はもうないけれど もしも。

もし、あの時。

春休みに 忍と。

あの伝説の吸血鬼　鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼である  
キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに。

怪異に、出遭っていなかったら？

たとえ出遭ったとしても、血液を差し出していなかったら？　と  
考えてしまう。

思ってしまう。

けれど、忍と出会っていなかったら。

あのときブラック羽川はねかわと対峙することも。

あのとき螺旋階段で戦場ヶ原を受け止めることも。

あのとき八九寺を案内することも。

あのとき神原かんばると命懸けで戦うことも。

あのとき呪われた千石せんごくを助けることも。

みんなと　出会うことはなかったのである。

あの日をきつかけに、今がある。

確かな、『今』が。

羽川と戦場ヶ原と八九寺と神原と千石がいる。

今は、なかったのかもしれないのである。

そう思うと、春休みのことも、案外いい出来事だったのかもと思  
える。

あの地獄を　きつかけにみんなと出会えたならば。

それでチャラにできる。

……結果的になにが言いたいのかというと、春休みの出遭いがあ  
って今がある。

なら、春休みのことがなかったらどうなのだろうか？

と言うことである。

僕はそのことを、身をもって知ることになった。

僕は『それ』に、直面する羽目になった。

今からその出来事を、一つの物語を。

僕　阿良々木暦あらいぎ ねきが、語ろうと思う。





## 第一話 プロローグ（後書き）

いかがでしたか？ プロローグは。

『物語シリーズ』は最も好きな小説で、何回読んでも飽きないくらい好きなので、書

くのはちょっと大変ですが、楽しいです！

この調子で頑張っていきたいと思っています。

続きも、更新は不定期ですが、是非読んでください！

## 第二話 戦場ヶ原ひたぎとの日常（前書き）

『第二話 戦場ヶ原ひたぎとの日常』という話は（ネタバレですが）ひたぎと暦

の会話だけで終わってしまいました。書いている私的にはびっくりです。

でも、原作とは違い、更生できていないところを暦に見せているので、いい会話に

なっただと思います。

それではどうぞ

## 第二話 戦場ヶ原ひたぎとの日常

夏休みが明けてしばらく経った。

タイムスリップした直後に『くらやみ』に遭い、凄く仲がよかった友人（この言葉だけでは足りない）である八九寺真宵（はちくじまよい）を亡くしたりと。

忙しい夏休みと夏休み明けではあったが（宿題にはそんなに手をつけていなかったので怒られた）とかではなく、普通に許されたと言つか、見限られた）、まあ、それなりに充実していただろう。

「夏休み　ね。私達、結構色々なことをしたわよね」

と、戦場ヶ原（せんじょうがはら）は、思い出に浸っていると聞いた風に言った。

「阿良々木（あらぎ）くんを監禁したり……、阿良々木（あらぎ）くんを監禁したり……、監禁したり」

「僕を監禁したことしか思い出せないのか、お前は」

つくづく酷いやつだよ、戦場ヶ原は。

時は昼休み。今、僕と戦場ヶ原は、一緒に仲良くお弁当を食べている。

……そんなときの会話がこれって、どうかと思うが。

「冗談よ。バイキングにも行ったじゃない……あれ？　行ったかしら？」

「覚えてくれていて嬉しかったが、それを言った直後の言葉は聞き捨てならんな」

「ごめんなさい。私、自分に都合が悪いことは忘れてしまう頭なの」

「僕と一緒にバイキングに行ったのは、そんなに悪いことだったのか！？」

「ええ」

「否定しないのかよ！」

「ただ僕が存在が邪魔なの！？　いくら何でも酷いだろ！」

「ったく……。戦場ヶ原、本当に更生したのか？　毒舌が戻ってきた」

ている気がするんだが……」

「しまった！ 今は阿良々木くんの前だったのよ！ 忘れていたわ！」

「ん？ 何か言ったか？」

「いいえ、更生しきれていない戦場ヶ原ひたぎは何も言っていないわ」

「自分で更生できてないって言っちゃったよ！」

羽川の努力が無駄になっちゃった！

……でも確か、原作だと更生しているんだよね……。

ここが原作とこれとの違い……か……。

「阿良々木くん」

「何だよ、戦場ヶ原」

戦場ヶ原の手作り弁当を食べている僕に、唐突に、

「無事に帰ってきてくれてありがとう」

につこりと微笑んで戦場ヶ原は言った。

そして、何かを考える暇もなく、戦場ヶ原はこう続けた。

「私ね、別に心配はしていなかったのよ。阿良々木くんが無事に帰ってくるって信じていたから」

「戦場ヶ原……」

感動的な台詞だ……！ 戦場ヶ原にしては珍しい！

「でも、阿良々木くんから『しんぱいすれな』ってメールが来たときは、私もさすがに心配したけど」

「まあ、そうだよ……。あんなメールが来たら普通……」

「ええ。私は阿良々木くんの頭を心配したわ」

「……………」

いい雰囲気だったのに……。

台無しじゃねーか。

ちゃんと更生しろ……。

「……まあ、そのあとに、阿良々木くんから、『あの件』について聞いたときは、ああ、私の考えていたことは、阿良々木くんを心配

していたのは全て杞憂だったのねって思ったわ」

「『あの件』って何だよ」

「阿良々木くんが幼女と童女と少女の全員とキスした件」

「……………」

それについてはちゃんと謝ったじゃん……。

ちゃんと『戦場ヶ原と羽川のラブシーンを見せつけられる刑』に、僕処されたじゃん……。

今になってそんなことを蒸し返すなよ。

案外根に持つてるんじゃないのか？ 戦場ヶ原は。

「根に持つてなんかないわ。人聞きの悪いこと、言わないで頂戴」

「お前こそ僕の心を読むな」

「そんなことはともかく」

と、惚れ惚れする手際の良さで戦場ヶ原は話題を変えた。

「ちゃんと言わせて頂戴」

「何をだ」

「黙って聞いていなさい」

疑問を持ったことを一蹴した戦場ヶ原は、深呼吸をして、改めて僕に向き合い、にっこりと微笑み

「おかえりなさい、阿良々木くん」

と言った。

その言葉に、僕は嬉しさを抱き、思わず飛び跳ねそうになったが、そんな衝動を抑え、僕もまた、戦場ヶ原に言うのだった。

「ただいま、戦場ヶ原」と。

戦場ヶ原ひたぎ。

心配させて 待たせて、悪かったな。

言うとは恥ずかしかったから、心の中で、思っただけにしておいた。いつか 言える、その時が来るまで。

## 第二話 戦場ヶ原ひたぎとの日常（後書き）

この小説は、昨日更新し始めたにも関わらず、今までで一番いい評価を頂きました

た!!

有り難うございます!!

さてさて次回は、羽川さんと駿河のどちらかが登場します!!

それではもうしばらく、暦の『日常』をお楽しみください

### 第三話 羽川翼との日常（前書き）

だらだらと続けて（そんなに書いてない）第三話。

今回は、羽川さんのご登場です。

それでは、どうぞ

### 第三話 羽川翼との日常

そんな感じで戦場ヶ原せんじょうがはらと仲良くお弁当を食べて（戦場ヶ原の手作り弁当、めっちゃ美味かった）、昼休みを終えた。

そして一緒に教室へと帰り（途中で戦場ヶ原は、『お手洗に行ってくるわ』と抜けたが）、席に座り、授業準備をしていると、  
「相変わらず仲がいいね、阿良々木あらあきくんと戦場ヶ原さんは」

と、誰かが僕に声を掛けてきた。

その相手は

「羽川はねかわ……」

クラスの委員長・翼つばさだった。

成績優秀 一年の頃からずっと学年トップで、この前、全国模試でもトップだった の優等生で、面倒見がいい。

一年の頃からずっと委員長をしていて、髪型も三つ編みで眼鏡と  
いういかにも『委員長』って感じの姿だった のは、約一ヶ月前までの話。

今はショートヘアにコンタクト。

前の『委員長』という姿を思い出させないほど 変わった。  
いわゆる、『イメチェン』である（本人もそう言っていた）。

そして 猫に魅せられ、虎に睨まれた少女。

戦場ヶ原が蟹に行き遭ったように 羽川もまた、猫に魅せられ、  
虎に睨まれたのだ。

ゴールデンウィークと文化祭前日と夏休み明け。

……彼女は、豹変した。

ある『ストレス』などによって

そんな羽川に、先日告白されたのだが……戦場ヶ原がいるため、  
僕はそれを振ったのだ。

少々思い出したいくないことを思い出してしまった……。  
「んー？ どうしたの？ そんな顔をして」



「あ……いや……」

「何か思い出したいくないことでも思い出したの？」

「……………」

こいつも相変わらず勘が鋭いな……。

こちもおちおち話せねえ。

「そうだ、阿良々木くん。今日、大丈夫かな？」

「ん？ 何が？」

「委員長と副委員長としての仕事があるの」

「ふうん……別に大丈夫だけど……」

「そつか。ならよろしく」

「ああ」

用はそれだけだったんだろう 羽川は席に帰っていった。

そこへ丁度戦場ヶ原が帰ってきた。

「阿良々木くん？ 羽川さま いいえ、羽川さんと何を話していたのかしら」

「おい、戦場ヶ原。今また羽川のこと、さま付けで呼んだろ」

「は？ 何を言ってるの？ 言いがかりは止めて頂戴」

「とぼけるのか！？ ここで！？」

「別に私が羽川さんのことをどう呼んでいたって構わないじゃない。阿良々木くんに言われる筋合いはないわ」

「僕ってそんなに邪魔なのか……？」

本当に更生しているのか？

羽川に再び強制プログラムをやって貰うか。

「そんなことより、何を話していたの？」

「いや。別にたいしたことじゃないよ。ただ、今日は委員長と副委員長としての仕事があるから、ちゃんとやってね、と、大丈夫？  
って」

「ふうん……なら、今日は一緒に帰れないわね」

「ああ……。そうなるわ」

「じゃあ、私は先に帰っておくわ。阿良々木くんを待ってても、無

意味だし」

「酷いな」

「いえ……そうではなくて、ただ単に、私が用事があるのよ」

「そうなのか」

「ええ。その代わり、明日は一緒に学校へ行きましょう」

「そうだな、そうしよう」

「ええ」

もうそろそろチャイムが鳴るな。

戦場ヶ原に、座った方がいいんじゃないのかと言おうと思った。  
その時だった。

「このまま……」

「え？」

戦場ヶ原がいきなり 不意に、窓を眺めながら、独り言のように呟いた。

「このまま、何事もなく、平和が続けばいいのにね」

「……………」

確かにそうだな。

春休みを境に、色々な怪異に僕は遭遇した。

鬼。

猫。

蟹。

蝸牛。

猿。

蛇。

蜂。

鳥。

そして 死体。

あと

「……阿良々木くん？ 考え事かしら？」

「あ……いや、何でもないよ」

「そう。なら、私はこれで。チャイムが鳴るから」

「ああ。じゃあまた」

「ええ」

そう言つて戦場ヶ原も席へと戻り 何事もなくチャイムが鳴り、授業が始まつた。

平和 か。

確かに……続けば、いいのにな

何事もなく。

怪異にも遭わず。

まあ、その、戦場ヶ原の、『平和が続けばいいのに』という願いは 浅はかな祈りは。

あつさりと 砕かれるのであつた。

### 第三話 羽川翼との日常（後書き）

この小説は、数話日常的な出来事やって、怪異絡みの事件に突入していきます。

どんな事件がお楽しみに（少しだけあらずじに書いちゃってるし）

はいそんな小説の次回は、いよいよ神原駿河の登場です！！

楽しみですね〜？

では、また次回会いましょう^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8451z/>

---

化物語 -もう一つの物語-

2011年12月28日20時56分発行